

二〇一一年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

二 限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

マークシート解答方法についての注意

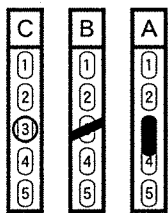
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ピエール・ド・クーベルタン男爵の創始した近代オリンピックは、古代ギリシアのオリンピアの祭典の復活を企図したという。が、両者は、似ても似つかぬ別物である。

紀元前八世紀頃にはじまり、紀元四世紀のキリスト教を国教としたローマ帝国による「異教禁止令」で幕を閉じるまで、約二〇〇年にわたって催されつづけた古代オリンピックでは、女性の参加が禁じられ、成年男子が全裸になって、走ったり、跳んだり、円盤を投げたり、殴り合ったり、馬車を走らせたりした。スタジアムの一角では、勝利を祈願し、また勝利に感謝して、選手の出身ポリスの守護神への祈禱が行われ、犠牲の羊や牛が殺され、臓物や血が飛び散るなかで肉を焼く煙が立ちこめていた。古代オリンピックは、供儀を繰り返す宗教儀式だったのである。

宗教儀式であっただけに、古代オリンピックには、明確な理念が存在した。その理念とは、同じ言語を用い、同じ宗教を有し、同種のポリス(都市国家)を形成し、自分たちを「ヘレネス」と称して他民族を「バルバロイ」(奇妙な言葉を話す種族)と蔑んだ古代ギリシア人が、自分たちのアイデンティティを再確認する、というものだった。そのため、オリンピック期間中は、「エケケイリア」(刀の柄にかけた「手を押さえる」という意味のギリシア語)と称する休戦が実現し、ポリス間の抗争は一時的に停止された。この協定を破ったポリスは、オリンピアの祭典への参加資格を剥奪された。それはギリシア民族ではないと宣告されることを意味した。

初期の古代オリンピックは、そのような理念を体現し、参加者はいっさいの金品を得ず、勝利者にもオリヴの冠が贈られるだけで、王の与える報奨をめざして闘うバルバロイの競技大会と峻別された。が、回を重ねるうちに(紀元前四世紀頃から)、各ポリスが金品を与えてプロの競技者をスカウトしたり、優勝者に賞金や年金を贈るようになり、さらに相手選手や審判に賄賂を贈って八百長をするなど、不祥事が相次ぐようになった。

先に、近代オリンピックは古代オリンピックと似ても似つかぬもの、と書いた。が、古代オリンピックの没落の経緯は、現

在のオリンピックと酷似した部分がある。戦争(政治対立)による継続の危機、権力者(古代は皇帝、現代は国家やメディア)の私物化、競技者のプロ化、それに古代オリンピックでも、プロ化した競技者が、試合前に特殊な植物の葉の煙を吸うなど、ドーピングともいべき行為が存在したという。

しかし、古代オリンピックの「墮落」には、近代オリンピックの歴史と決定的に異なる点がある。それは、古代オリンピックには最初にヘレネス(ギリシア人)の理念が存在し、それが消失することで墮落がはじまったが、近代オリンピックには、クーベルタン男爵が創始した当初から、確固たる理念が存在しなかった、という点である。

父親の薦めで陸軍士官学校に入ったクーベルタンは、プロシア(ドイツ)との戦争に敗れたあとの [ア] を煽る当時のフランスの教育方針に疑問を抱いたという。そして、二一歳のときにイギリスのパブリック・スクールを視察し、そこで行われていたスポーツ教育に強い [イ] を受けた。さらに、オリンピック遺跡の発掘調査報告に [ウ] されたクーベルタンは、スポーツによる青少年の教育と、古代ギリシアの「エケケイリア」のような「平和」を希求し、国際オリンピック委員会(IOC)を発足させ、一八九六年にアテネで第一回国際オリンピック競技大会を開催するまでにこぎつけた。

近代オリンピックは、その発足当初から政治的経済的思惑に利用され、 [エ] されたうえ、万国博覧会の「見世物」ととらえられたのだった。その意味で、近代オリンピックは、墮落したあとの古代オリンピックをそのまま [オ] したもので、という言い方もできる。しかも、クーベルタンの掲げた「オリンピック運動」の理想がそのまま実現されたところで、それは、断じて、今日まで継続的に支持されるような内容のものではなかった。彼の支持したアマチュア規定によれば、労働者の参加が拒否され、体育教師もプロと見なされて参加できなくなる。また彼は、女性の参加にも否定的で、(真のオリンピックの英雄といえ、それは成人男子)であり、(オリンピック競技での女性の役割は昔の試合でそうであったように、勝利者に栄冠を与える仕事)と語っている。

クーベルタンが理想とした古代ギリシアの「エケケイリア」も、もとはといえば、けっして「世界平和」を希求したのではなく、戦争よりも「ヘレネス」としてのアイデンティティ(オリンピック祭典)のほうが重要という認識があつて、はじめて実現し

たものだった。そのような意識の存在しない近代社会のなかのオリンピックには、戦争を停止させる力など存在せず、逆に、第一次、第二次の両大戦によってオリンピックのほうが開催中止に追い込まれたのも、当然の結果といえる出来事だったのだ。^③

クーベルタンの提唱した「オリンピック運動」は、一九世紀末のブルジョワ思想の域を出なかった。保守的で先見性に欠け、時代の進歩とともに錯誤が際立ち、普遍性を獲得できるものではなかった。クーベルタンは、思想家としてあきらかに二流であり、ナチス・ドイツの宣伝と化したベルリン・オリンピックを、その整然とした外観だけから賛美し、晩年にヒトラーから与えられた高額の年金で生活していた、という事実も納得できる。が、けっして皮肉ではないのではなく、その程度の思考から世界平和という実現不可能な大理想を掲げたからこそ、近代オリンピックは、今日まで生きながらえたとはいえよう。^④

ナチスによる政治利用も、二度の大戦による三大会の中止も、人種差別問題に端を発したモントリオール大会におけるアフリカ諸国のボイコットも、ソビエト連邦のアフガニスタン侵攻に反対した西側諸国によるモスクワ大会のボイコットも、その報復としての東側諸国によるロサンゼルス大会のボイコットも、さらに過度の商業主義が招いた開催地決定にまつわるIOC委員の金銭疑惑も、すべて、IOCの発足と第一回アテネ大会以来、内包されていた問題といえるのだ。

問題が表面化するたびに、オリンピックの危機が叫ばれた。が、それでもオリンピック大会が継続したのは、その時々において「時代の波」に乗った（流された）からだ。た。「時代の波」に乗る（流される）というのは、明確な理念が存在しない、ということである。あるいは、簡単に引つ込める程度の理念しかない、ということである。

スポーツマン（や芸術家）は、己のプレイ（作品）を完成したいと思うあまり、主義主張は二の次にして、とりあえずスポーツ（芸術）を行いうる環境を選択する、という傾向がある。そのため、往々にして保守的で現状維持的な立場をとることが多い。近代オリンピックも、そのような「とにかくオリンピックを開催したい」というIOCの希望と、それを利用しようとする政治勢力とのバランスのうえで、開催されつづけた。

が、政治勢力は変化する。ナチス・ドイツも、大日本帝国も、人種隔離政策も、共産主義諸国も崩壊し、独裁者ヒトラーが

黒人優勝者との握手を拒否したことや、植民地(韓国)の選手に日の丸をつけさせて優勝したこと、黒人差別の実態や、国威発揚のための国家をあげてのドーピングなどが、恥ずべき過去として歴史に残された。その意味で、近代オリンピックは「A」に勝った」ともいえるのだ。それと同様に、現在の「カネまみれのオリンピック」も、将来、恥ずべき過去として歴史に残され、オリンピックが「経済に勝つ」ときも訪れるかもしれない。あるいは、オリンピックが、ほんとうに世界平和に貢献するときに訪れないともかぎらない……。

近代オリンピックは、おそらく今後さらに困難な判断を迫られることになる。クルドやコソボ、さらにチベットなどがNOC(国内オリンピック委員会)を設立すれば、どう判断するのか？ 結論は一筋縄ではないかない。しかし人種隔離政策をとっていた南アフリカ共和国を、いち早くオリンピック(国際社会)から締め出し、その政策を廃止した南アをいち早く復帰させたのはIOCだった。また、パレスチナのオリンピック委員会をイスラエルとの和平交渉の締結以前に承認し、香港やグアムのNOCを承認している。たかがスポーツに何ができるのか、とも思うが、米中国交回復のきっかけになったピンポン外交や、ワールドカップ・サッカーでアメリカとイランの選手が試合前に一緒に記念撮影をする、といった行為が両国民に与える影響は、けっして小さなものではない。

さらに、昨今の「カネまみれのオリンピック」は多国籍企業とメディアの支配する国際社会・国際経済の実態を表すものであり、オリンピックがその実態を暴露している、という見方もできる。ならば、国際社会のあり方を考え、運営するうえで、政治や経済(国連やIMF)以外の手段として、オリンピックはおおいに利用価値があるようにも思える。

ともかく、オリンピックに「理念」を付与するのは、これからの作業なのである。

(玉木正之「スポーツとは何か」所収、「オリンピック」より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 文中の傍線部①に「似ても似つかぬ別物」とあるが、その理由として最も近いものをつぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 古代オリンピックには、理念を踏みにじったものは参加を許されないという強い姿勢があったのに対して、近代オリンピックでは、その理念が時代の波に流されたから。

b 古代オリンピックには明確な理念が存在したのに対し、近代オリンピックには理想はあったが確たる理念がなかったから。

c 古代オリンピックでは一貫して、参加者はいつさいの金品を得ず、勝利者にもオリーブの冠が贈られるだけだったが、近代オリンピックでは金メダルを争い、「カネまみれのオリンピック」になっているから。

d 古代オリンピックでは女性の参加が禁じられていたのに対し、近代オリンピックでは女性の競技も盛んだから。

e 古代オリンピックでは戦争を抑止するための理念があったのに、近代オリンピックは二度の世界大戦を招いてしまったから。

f 古代オリンピックが最後まで供儀を繰り返す宗教儀式だったのに対し、近代オリンピックは東西が対決する世界のスポーツの祭典だから。

問二 文中の空欄

ア

オ

のを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a	アー再戦	イ影響	ウ同行	エ翻訳	オ真似
b	アー闘争	イ関心	ウ開眼	エ強奪	オ再建
c	アー不満	イ快感	ウ触発	エ打擲	オ再現
d	アー復讐	イ感銘	ウ刺激	エ翻弄	オ継承
e	アー憤激	イ感化	ウ覚醒	エ比較	オ拡大
f	アー対立	イ衝撃	ウ精進	エ適用	オ利用

問三 文中の傍線部③に「当然の結果といえる出来事だった」とあるが、その理由として最も近いものをつぎのa～fの中から

一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 近代オリンピックは、墮落したあとの古代オリンピックの複製品だったから。
- b クーベルタンが理想とした古代ギリシアの「エケケイリア」には、もとはといえば、小規模な紛争をしずめる力しかなかったから。
- c 近代社会には、戦争よりもオリンピックのほうが重要という認識が存在しなかったから。
- d 第一次、第二次の両大戦の規模があまりに大きかったから。
- e 近代オリンピックは、発足当初から政治的経済的思惑だけを大切にしてきたから。
- f クーベルタンの理想では、アマチュア規定を守ることが大切にされていたが、戦争については言及されていなかったから。

問四 文中の傍線部④に「今日まで生きながらえた」とあるが、その理由として最も近いものをつぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a スポーツマンは、主義主張は二の次にして保守的でとりあえず現状を大切にす傾向があるから。
- b クーベルタンは、ベルリン・オリンピックを整然とした外観から賛美するなど、時流をとらえるのに敏感であったから。
- c クーベルタンが保守的で先見性に欠けているのを見て、多くの国が協力する体制をとったから。
- d クーベルタンの掲げた「オリンピック運動」の理想がそのまま実現されてきたから。
- e 「時代の波」に流される程度の浅薄な理念しかないから。
- f 世界平和という理念があまりに大きくてまだ実現されていないから。

問五 文中の空欄 A に入る最も適切な言葉を、つぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 過去
- b 戦争
- c 独裁
- d 政治
- e 理念
- f 古代

問六 文中の傍線部⑤に「オリンピックが『経済に勝つ』とあるが、どのような意味か。最も近いものをつぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a カネまみれのオリンピックだったと将来恥ずべき過去として記憶されること。
- b 放送権料やスポンサーからのお金をIOCが自由に設定できるようにすること。
- c 経済不況の中でもオリンピックが揺るぎなく開かれるようになること。
- d 発足当初からあった各国の政治的経済的思惑から解放されること。
- e オリンピックの参加者が、金品に目をくらませることなく、オリイヴの冠や名誉だけで満足する時代を迎えること。
- f IOCが多国籍企業とメディアの支配する国際社会・国際経済状況をリードする立場に立つこと。

問七 文中の傍線部⑥に「オリンピックに『理念』を付与するのは、これからの作業なのである」とあるが、どのような意味か。

最も近いものをつぎの a～f の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 危機が叫ばれながらオリンピック大会が継続したのは、明確な理念が存在しなかったからで、いま慌てて理念作りをする。「時代の波」に乗れなくなる恐れがあるということ。

b 多国籍企業とメディアの支配する国際社会・国際経済を規定する理念作りには、多くの人の利害の調整が必要で、そのためには膨大な時間がかかるということ。

c 古代オリンピックの理念は、自分たちのアイデンティティを再確認するものだったが、我々を取り巻く国際情勢はアイデンティティを求めておらず、まったく別の理念が必要であるということ。

d 「カネまみれのオリンピック」と批判されて間もない今、すぐに理念を決めることがIOCの利益と重ならないということ。

e 国際社会のあり方を考え、運営する上で、今のままのオリンピックには大いに利用価値があるということ。

f 流動的な世界情勢の中で、オリンピックとはこうあるべきだという理念を付与するには見極めがつけにくいということ。

（二） つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

空港に向かっていた。わたしがアテンドする団体客を乗せた飛行機の到着時刻は早かった。料金設定の安い経由便の不便さ
はこんなところにある。でも長旅の疲れなどものともせず、まるまる一日儲かったと喜ぶ旅行者はけっこう多い。夏ならもう
朝五時前から明るいけれど、夏が終われば、日はたちまち短くなっていく。朝晩はもうすっかり冬の気配で、バスにもしつ
り暖房が入っていた。

A 「ちよつと暑すぎない？」とわたしは大きな声で運転手に言った。

まだ乗客はわたしだけだった。空港に近づいてくると、乗ってくる人もちらほらといるのだけれど、いつもしばらくは車内
に居るのはわたしと運転手だけだった。これが首都からその郊外を経由して空港へと向かう路線だと、空港でさまざまな職務
に従事する人たちや早い時間帯の便を利用する個人旅行者たちで、始発からでもけっこうお客は多いようだった。わたしは空
港を挟んで首都とはちようど反対側の田舎に住んでいた。わたしが籍を置いている大学から近いというただそれだけの理由で
選んだ町だった。そこからわたしがアテンドの仕事で空港に行くのは、だいたい週に二、三度だった。それでも何人かの運転
手たちとはいつの間にか顔見知りにもなる。

運転手は答えなかった。エンジンの音が揺さぶる、ねつとりとした暖気の泥壁に言葉は阻まれてしまったのか、それともわ
たしの発音が悪かったのか。運転席の斜め後方、前輪のちようど上の少し高くなった席に座っていたわたしは大きなルームミ
ラーを覗き込んだ。何度かハンドルを握っているのを見かけたことのある人のような気がしたのだけれど、急に自信がな
くなった。

運転手はわたし自身がそうであるように明らかにこの国の人ではなかった。移民の二世代目や三世代目だったら、わたしの
発音がひどいものだとしても、なんとなくこちらの言いたいことは理解してくれると思う。この人はずいぶん歳をとってか
ら、ここにやって来たのかもしれない、と勝手な想像をする。

もつともいまだに外国人——いや、ここではわたしは外国人だから、異なる言語や文化に生きてきた人たちの年齢なんてよくわからない。髪や肌の色や顔のつくりがまるでちがう人たちと実際に話していると、年齢についての印象はさらに混乱した。母語でしゃべるときには、そこに年齢や世代や職業に連結するヨクヨウやリズム、語尾の伸長、声の質感といったものがあるのを、わたし自身がある特定の集団に属しているからか、たしかに感じ取ることができるような気がする。ということは、ここではわたしは何にも属していないってことになるのだろうか？ この運転手さんも？

母国にいたときに、何かにすっかり帰属できていたのか？ それも怪しいものだ。

少なくとも母国語のなかにいた？ ただそこに閉じ込められていただけなのかもしれない。ところが、外国に出て行つたところで、そこから逃れることができるわけではない。だつてこうしてわたしは母語で考え、書いているのだから。

しかも母国とのつながりは決して切れているわけではない。時差の向こうの友達と電話でしゃべり毎日のようにメールのやりとりをし、インターネットでたえず母国の情報に触れている。そのうえ母国の人たちにしよつちゅう会つてもいる——現にこうして母国からの観光客をお迎えにあがっているわけだから。この運転手さんにしても、同じ国あるいは同じ地域出身の人々のコミュニティーのなかで生活しているのかもしれない。だけど、わたしの場合、故国にいても食つていけないからという理由で、ここに来たわけではない……。

そんなことをぐだぐだ考えているうちに、わたしはぐうぐう眠りこけ、いったい誰のものだか、やかましいいびき軒になりかけの寝息が聞こえてきて、はっと目覚め、はたまたバスのドアが開く音と同時に、よだれをつつと垂らしそうになる口を閉め、崩れかけた意識のゲートを通り過ぎていくバスのなかには亡霊のように人影が現れては消え、気がつくつと、バスは空港に着いていた。

もこもこした暖かい空気の外套は、すぐにはぎ取られた。外はかなり寒く、息が白かった。わたしは小走り、バス乗り場から空港の建物のなかに入った。いつもだったら、まず到着便の情報が表示されたモニターを確認するのだが、携帯で時刻を見ると、いつもの飛行機が着くまでにはまだずいぶん時間があつたので、わたしはまず上の階にある出発ロビーに行くこと

にした。

まだカフェバーは開いていなかった。こうこうと明かりのともる通路とは対照的に、暗い洞穴のような店内のテーブルの上では、ひっくり返された椅子が葉を落としたカンボクを思わせる無数の脚を宙に投げ出していた。滑走路に面した窓に映った椅子の茂みのなかを時おり、車や飛行機が発光性の虫のように移動していた。

足音がした。振り返ると、顔なじみの店員のステファンだった。

ステファンというのは、彼の本当の名前ではないのだけれど、きみがそう呼びたいんだったらそれでもかまわないと言ってくれたので、遠慮なくそうさせてもらっている。名字も教えてもらったことがある。途中で息継ぎがしたくなるような長く複雑な名前で、正確に発音してみようと硬い粘土でもこねるみたいに口を動かしてみたけれど、無駄な努力だった。細身の彼とは似ても似つかぬ、重ねられる母音でやたらと肉付きのよくなつた彫像が次々とできあがるばかりだった。彫りが深くてメランコリックなまなざしの彼は、機会があるたびに、わたしに自分の名前を発音させては、冗談好きの滑稽な部分だけからできた自分自身の姿でも発見したように、いかにもおかしそうに笑つたのだ。一方、わたしの名前の発音は、彼にとつて、そして多くの人たちにとつて、ちつともむずかしくないらしく、だからいつ名前を呼ばれても、その声によつて引き裂かれたり、ゆがめられたりしたその名前の奥から、わたしの知らないわたしが現れるようなことはなかった。いつまでたつてもわたしはわたしでしかないような気がして、意外性もなければ、代わりばえもせず、それはそれで退屈なものだ。

「やあ、カオリ」

「やあ、ステファン」

ステファンは店に入り、わたしもあとに続く。明かりをつけ、彼はカウンターのうしろにまわる。カフェマシンのスイッチを入れて、エスプレッソをふたつ作る。

「ほら」

「ありがとう」

わたしたちはしばらく黙ってエスプレッソをすする。

「ひさしぶりだね」とステファンが言った。

「先週の水曜日も来たんだけど、あなたがいなかったのよ」

「そっだったけ？」

「ねえ、ステファン」とわたしは気になっていたことを尋ねた。「最近、キンチャンの姿を見かけないような気がするんだけど……」

「たしかにここ数カ月来、不法滞在者に対する締めつけが厳しくなっているからな」とステファンが憂い顔になった。「状況はひどくなる一方だからね。おれだっていまここにやって来たんだったら、難民だって認定してもらえたかどうか……。でも彼なら——いまのところは——大丈夫だ。きのうも見かけたから。安心して」

「スゥ」

つい最近まで、わたしの住む町から首都へと向かう幹線道路沿いの小さな工場跡に寝泊まりしている人たちがいた。故国での内戦を逃れてこの国までやって来た人たちだということだった。ある日、その姿が突然見えなくなった。強制排除されたのだということを翌日の新聞で知った。左派の町会議員や人権ヨウゴ団体のメンバーが当局に対して抗議するコメントが掲載されていた。あの人たちがもしも強制送還されていたら？ その土地では、若い男性の数が激減していた。ごくふつうの青年が潜在的テロリストとして政府軍によって夜中に拉致され、二度と帰ってこなかった。わたしがバスから見たあの人たちのなかには、青年の姿に混じって、おなかの大きな女性もいた。さつきもバスはあの工場の前を通ったはずだった。わたしはぬくぬくとしたバスのなかで心地よくまどろんでいた。あの人たちのことが一瞬でも頭をよぎっただろうか？

実際のところ、キンチャンを難民と断言するのはいいのかわからない。だいたいどこの国の人なのかも知らない。それでも、空港に住みついて、一日中ターミナルからターミナルへとぶらぶらしているようなキンチャンが、当局から好意的な目で見られるような人物ではないことはまちがいない。

「ま、そのうち現れるさ」とステファンは言つて、カウンターから出ると、脇の従業員用の部屋に着替えに入った。わたしはカウンターのテーブルの上にデイパックを置いて、食べかけのチョコレートバー、それからきのこの新聞と書類挟みを取り出した。

新聞を読んでいると、どこかのフットボールチームのユニフォームみたいな上着に黒いエプロンを巻いて出てきたステファンがきのこのフットボールの試合の結果を訊いてきた。ワールドカップの最終予選の試合が各地で戦われていた。数年前に休戦協定が結ばれて以来少しづつ混乱から立ち直りつつあるステファンの母国もケントウを見させていた。

「読む？」とわたしは訊いた。

「いや、いいよ」とステファンがふーつと煙草の煙を吐いてから言つた。「読んでも、よくわからないからね」

「わたしなんかよりずっと上手に話せるのにね」とわたしは言つた。

D
べつに気まずくなる必要はなかったのだけれど、まるで書類のチェックに専念しているかのように、うつむいたわたしは書類挟みを開いて紙切れをぺらぺらめくつていた。

「あらま」

二日ほど前にファクスされてきた書類は、印字がひどくて、文字の列はなんだか昼間の商店街やスーパーにいつばいいる老人たちの歩みみたいな感じで、まるで読めなかった。どうせいつもと同じ便だろうと思つて、受信したときにちゃんと確認しておかなかった。そういえば、これまでろくに書類なんて見たことがなかった。

判読できるかぎりでは、どうやら飛行機が到着するのは、幸運にもここからはいちばん近いとなりのターミナルのようだった。

では、わたしが待ち受けていなければならないのは、どの航空会社の飛行機なのか。バイト先の旅行代理店の担当者の携帯に電話をかけてもいいのだけれど、こんな理由で叩き起こすわけにもいかない。まあ目ぼしが見つからないこともない。とりあえずそれとおぼしきターミナルに行つて確認してみよう。

ひまわりの種子をかじるシマリスみたいに、チョコレートの残りを大急ぎで口に突っ込むと、エスプレッソを流し込んだ。書類挟みをデイバックに突っ込んで、ステファンに言った。

「ありがとう。わたし行くよ」

「おや。慌たらしいな」

「うん。どうもターミナル、まちがってみたい」とわたしは笑った。「念のため、早めに行くわ。じゃあ、いい一日をね！」
「きみもね」と言つて、ステファンは煙草を持った手を軽く上げながら、ウインクをした。

空港の建物の外はやつぱり寒かった。東の空では闇の色が薄まりつつあった。複数のターミナル間を結ぶ無料のシャトルバスは時間帯が時間帯だからか、なかなかやって来なかった。

わたしがバスに乗り込むとき、降車口から何人が降りた。バスがドアを閉める寸前で、慌てて飛び降りた人がいた。

わたしはどきりとした。危ない、と思つたからではなくて、その姿がなんだかわたしに似てなくもなかったからだ。

わたしは座席に座つた人たちの様子をうかがつた。わたしのほうをちらと見たほかの乗客の顔には、とくに仰天した様子もいぶかしげな表情も見えなかつたので、あれはきつとわたしではなかつたのだろう。べつに忙しい日々を送っているわけでもないのに、いや、だからなのか、ふと自分自身のあとを追いかけているのか、自分自身から追いかけてられているのか、などと考えはじめてわけがわからなくなるときがある。自分は逃げ出そうとしているほうなのか、それとも置き去りにされたかなくて必死こいて追いかけているほうなのか、だんだん混乱してくる。

わたしとしてはとにかく逃げたい気分なのだけれど、遠ざかる背中を見つ、一人で逃げられても困るんだけど、と泣きだしそうになつてはとにかく逃げたい気分なのだけれど、遠ざかる背中を見つ、一人で逃げられても困るんだけど、と泣きだすだけで、そうしていたら時間だけはそこに吸い込まれるようにして過ぎていく。どちらのわたしにも、思い切つてその空虚に飛び込むだけの勇氣はまだないようだった。接触した拍子に、二人ともども仲良く絡まりあいながら奈落の底に真つ逆さまに落ちてしまつてはかなわないと、追いかつこのふりをしてはいるだけなのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、シャトルバスは目的のターミナルに着いていた。はっと気がついたときには、ドアが閉まりそうになっていて、わたしは慌ててバスから駆け下りた。

その勢いのまま、長い階段を使って到着ロビーにまで降りていき、モニターの前に立った。わたしがアテンドすることになっている団体客を乗せていてもおかしくなさそうな便が、十五分ほど間隔をあけて三便あった。予定より早く着いている飛行機もあった。

困ったなあ、と思っているうちに、到着ゲートからはアジア人観光客の波が次から次に溢れ出してくる。ゲートの周囲には、ツアー名の記されたプラカードを掲げた女性やお客さんの名前を書いた紙切れを持った運転手の姿が点々としている。

団体客の人たちに対して自分の身分を証明してくれるものを何ひとつ持って来ていないことに気がついた。いつもどうやって対処していたのか。記憶のリンク^⑤カクがぼやけていた。いままではうまく行っていたのだ。

わたしはまるで人目を避けるようにゲートの前に迎えに来た人たちの背後に控え目に立っていた。早朝にもかかわらず、べえべえとにぎやかな羊の群れは、いまや有能な牧羊犬に導かれて、次から次へとおいしそうな草の生えた牧草地に消えていった。自分たちの日々に繁茂する退屈のペンペン草に食い飽きた羊たちは、となりの（というか、海の方の）芝生をとことん食い荒らすのだ。その落とした糞で、土地が肥えるのを喜ぶ人もいれば、草なんてすぐに生えてくるのに土地をぐちゃぐちゃにされたと不愉快に思ったり、群れの放つ異臭に顔をしかめたりする人がいるのは仕方のないことかもしれない。

迷える間抜けな牧羊犬としては、羊たちのほうから近づいてくれるのを待つほかない。

（小野正嗣『線路と川と母のまじわるところ』所収、「旅する部族」より。ただし原文の一部を変更した。）

問一 傍線部①～⑤のカタカナの部分にふさわしい漢字を、次の各群のa～lのうちからそれぞれ二文字ずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

① ヨクヨウ

a	仰
b	楊
c	拐
d	陽
e	容
f	用

② カンボク

a	溝
b	朴
c	幹
d	樹
e	陥
f	冠

③ ヨウゴ

a	養
b	御
c	曜
d	擬
e	護
f	獲

④ ケントウ

a	拳
b	踏
c	闘
d	見
e	権
f	健

⑤ リンカク

a	輪
b	格
c	殻
d	閣
e	厘
f	郎

問二 傍線部Aに『ちよつと暑すぎない?』とわたしは大きな声で運転手に言った」とあるが、このときのわたしの心情はどのようなものか。その説明としてつぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 相手は外国人だから、小声で話しかけたら聞きとれないだろうと思つて大きな声で話しかけた。
- b バスのエンジン音が大きかったので聞こえないかもしれないと考えて、大きな声を出した。
- c 車内に入っている暖房装置の音が大きかったので、聞こえやすいように大きい声で話しかけた。
- d 顔見知りの運転手だったので、いかにも親しい風にさりげなく話しかけた。
- e 顔見知りだと思つた外国人だから、親しみをこめてなれなく大きく声で言った。
- f 運転手は顔からして外国人なので優越感が少し生まれ、横柄な態度で質問した。

問三 傍線部Bに「ある特定の集団に属している」とあるが、ここではどのような意味か。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 母国の大学で言語一般について研究している。
- b 外国の大学で言語の音声的な特徴を研究している。
- c 外国語を使つて生活するコミュニティーをもっている。
- d 外国で、同じ母国出身のコミュニティーをもっている。
- e 職業人として特定の仕事に従事している。
- f 学生として特定の研究課題に取り組んでいる。

問四

傍線部Cに「いつまでたってもわたしはわたしでしかないような気がして、意外性もなければ、代わりばえもせず、それはそれで退屈なものだ」とあるが、どういうことか。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 自分は外国にやって来て大学に籍を置きながらアルバイトをしているが、その国の言葉は身につかず、母語でしか物を考えられないまま、このままでは自分の知らない未知の自分には出会えないのではないかと少しつまらない思いにとらわれている。

b 海外にやって来て勉強とアルバイトをこなすうちに、いろいろな言語を話す人たちと知り合った。それぞれの言語には思いもよらない発音やアクセントがあつて、人の名前も母語とは異なるニユアンスが生まれ、それを彼らは楽しんできた。ところが自分の名前はそなかではだれにとつても発音しやすいものだったので、彼らは楽しんでくれなかつた。

c ステファンは本当の名前を自分に発音させることで、メランコリックな彼の性格とは異なる冗談好きな部分を見出して楽しんできた。だが自分の名前を発音してもらつても、生真面目に物を考えがちな自分の性格とは異なる滑稽な部分が生まれてこない、自分にとつては面白がなかつた。

d 海外に飛び出してきた自分は、母語と距離をとることで新しい自分が生まれてくるのではないかと希望を抱いていた。ところが自分の名前は外国の人には発音しやすらしく、母国にいるときと自分の在り方に何ら変化が生まれない。このままでは新しい環境でも自分は変わらないのではないかと少し残念に思っている。

e 空港でさまざまな出自の人たちに出会いながら、いままでは違う未知の自分に出会えるのではないかと期待が生まれた。ところが自分が国を出た理由は彼らとはまったく異なっており、彼らとは交流が深まらないような気がして残念に思っている。

f 外国にやって来てアルバイトをしながら大学に籍を置いているが、なかなか母語で考える自分と距離をとることができない。自分の名前ひとつとつてみても、空港で出会う人たちは自分の名前を母語とそっくり発音するので、見覚えがよくなるわけでもなくがっかりしている。

問五 傍線部Dに「べつに気まずくなる必要はなかったのだけれど」とあるが、このときのわたしの心情はどのようなものか。

つぎの a ～ f の中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a ステファンに対して自分が言ったことは必ずしも間違っていないと自分は考えているが、彼の母国に対する思いを鑑みない、やや率直すぎる物の言い方になってしまったので、そのことに少し引っかけをおぼえている。

b 自分は不法滞在者として暮らすステファンと気兼ねなく話せる間柄だった。しかしステファンの母国の情報の載る新聞を何の気なしに渡そうとしたことが、やや無神経に思えてきて、恥ずかしくなっている。

c 気兼ねなく話し合える間柄のステファンだったが、彼にとつて外国語で書かれている新聞を気軽に渡そうとした自分の態度は心無いものだったと気づき、あわてて反省している。

d ステファンとの会話で自分が言ったことは必ずしも見当はずれではなかったと思っている。もともと、自分の口調は傲慢でそのことを反省する気持ちが生まれている。

e 気兼ねなく話し合えるステファンだったが、不法滞在者にとつて状況がひどくなっている最中に、呑気な調子で会話をしてしまったことが鈍感だった気がしている。

f 顔なじみのステファンが相手だから、気ままな会話を楽しむことができたが、アテンドの仕事を適当にすませていることに気づかれたかもしれないと思つてきまり悪く思っている。

問六 傍線部Eに「泣きたしそうになっている自分にも気がつく」とあるが、どういうことか。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 自分としては、母語に閉じ込められている存在から逃げだした新しい自分とは同一化できず、古い自分を譲り渡したくない気持ちがいまにも爆発しそうになっている。
- b 自分のなかには母国に帰りたい自分と帰りたくない自分の二人がいて、どちらが本当の自分なのかをはつきりさせることができず、そんな自分が苛立たしくて悲しくなっている。
- c 母語から解放された自分は、さっさとこれまでの自分を見放そうとしていて、その姿をイメージすると迷子になったような気がして腹が立って悔しくなっている。
- d 母語から解放された新しい自分に憧れるものの、なかなかそうなれない自分としては、時間だけがどんどん過ぎていくことに恐怖を感じ、それが頂点に達しつつある。
- e 外国語を身につけた新しい自分が古い自分を連れ出して、手を取り合って一緒に奈落の底に飛び込もうとしているのが怖くておびえている。
- f 母語から解放されて自由になっっている新しい自分を夢見るものの、そんな自分には到底なれそうにないと、取り残されたような気持ちに襲われて悲しい思いをしている。

問七 傍線部Fに「まるで人目を避けるように」とあるが、このときのわたしの心情はどのようなものか。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a アテンドのために必要な身分を証明するものを持っていなかった自分が、自身のアイデンティティの迷いと重なり、

その不安から思わず隠れていたくなっている。

b 身分を証明するものを持ってこなかったことから、今回のアテンドの仕事が最初からつまずいてしまったように思えた。団体客に合わせる顔がないと思ってこそこそ振舞いたい。

c 気ままなアルバイト気分からうっかり身分証明書を忘れてしまった自分が許せず、消えてしまいたい気持ちが強く生まれている。

d 母国から逃げたい自分とそうではない自分とに引き裂かれてアイデンティティに悩んでいる自分は、いまは母国からの観光客と顔を合わせる気分ではなくて、できれば見つけたくない気持ちになっている。

e いまここで母国からの観光客に会ってしまうと新しい自分に生まれ変われないような気がして、いつそ姿をくらしたい気持ちになりかけている。

f 母国から解放された新しい自分を夢見るいま、次々にやってくる母国からの観光客を見ると、古い自分の姿を見るよ

うで照れ臭く、できれば見たくない気持ちになっている。

(三) つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

一九九四年度にノーベル文学賞を受賞した大江健三郎の受賞記念講演は、「あいまいな日本の私」と題されていた。これはもちろん、その二六年前に川端康成が日本人として初めて同じ賞を受けたときに行った講演を強く意識したものだ。あらためて言うまでもないことだが、それは川端の「美しい日本の私」をもじった「あいまいな日本の私」という、一見パロディ的で、ノーベル賞講演という晴れがましい場にはあまり相応しくないタイトルそのものにはつきりと現れている。二つのノーベル賞講演の対比を通じて誰の目にも明らかになったのは、世界に向かいあう日本作家の意識が、そしておそらくは世界における日本文学の位置が、この四半世紀の間にある転回^Aを遂げたということである。

川端が受けたノーベル賞は、なによりもまず、世界(欧米)とは際立つて異なつた日本的な美学に対して与えられたものだった。いや、もつと正確に言うならば、当時はまだ「日本独特の美学は、その他の世界とは——理解しあえないとは言わないまでも——根本的に違つていて当然だ」という期待が世界(欧米)の側にあつて、その期待に込めてくれる代表者として、川端康成が選ばれたということになるだろう。断つておくが、私は実際に川端の文学がそれほど外国文学と比べて異質、たどか、理解しにくいとは必ずしも思わない(外国の教養ある読者にとつて、川端文学が大江文学よりも理解しにくいということは、たぶんないだろう)。ただ、そういった世界からの「期待」を川端が、好むと好まざるとにかかわらず、どうしても引き受けざるえない「歴史的ポジション」にいたということは事実である。

それに対して、大江が受けたノーベル賞は、日本文学が「日本独自の美学」といつた看板をはずして、言わば余計な形容抜き、「文学」それ自体として世界に受け入れられるようになったことを象徴するものと考えられる。川端の「美しい日本の私」は、「美しい」といつた(あるいは別の形容詞でもいいのだが)単一の形容詞ではつきりと表現される「日本」を前提とし、自分がそれと一体化した存在であることを示すことによつて、日本の外にいる「世界」の人々を結局自分と区別するような表現だった。それに対して、大江の「あいまいな日本の私」は、自分が同一化できる「美しい日本」などというものはなく、自分のよつて

たつところが「あいまい」(面義的)であると自覚することを通じて、むしろ世界に対して開かれた姿勢を取り得ることを強調しているように見える。おそらく、川端のノーベル賞講演のタイトルに端的に表された、世界に対する「日本的」作家の姿勢と一線を画し、それとは異なった自らの姿勢を際立たせるためにも、「あいまいな日本の私」という、ユーモラスというよりはむしろパロディ的なこの表題が必要だったのだろう。

ノーベル賞講演の中で、大江は川端講演に触れ、それがきわめて美しいものであると同時に、「あいまい」(vague)なものであったと評価し、その意図的なあいまいさはすでに講演のタイトルにあらかじめ示されていたと指摘している。つまり「美しい日本の」における助詞「の」の機能が、そもそもあいまいだというのである。この指摘を読んで、私はまさにこの点について以前から詳しく論じていたタチヤナー・グリゴリエフというロシアの日本文学者の主張を思い出した。グリゴリエフはすでに一九七一年に、「の」の用法がきわめて日本的であることを指摘し、サイデンステッカーの英訳タイトル「Japan, the Beautiful, and Myself」が川端の真意を伝えない誤訳であるとまで主張しているのである。グリゴリエフによれば、日本語の「の」とは英語の and のように二つのものを並列するのではなく、むしろ二つのものを一体化させる機能を持つ。だから、川端がこの表題によって本当に言いたかったのは、日本と不可分な形で結びついた自分ということのはずだ。ところが、「違う文化的伝統を受け継ぎ、違う考え方をする人間であるアメリカ人訳者のサイデンステッカーを指す——引用者注は、自分に理解できるようなやり方では、これを理解できなかった。つまり彼は『美しい日本と私』という風に理解したのだ(中略)。その結果『日本がこうであるからこそ、私もこうなのだ』という川端の主要な思想が消えてしまう」。そしてグリゴリエフは川端講演のタイトルを「美しい日本によって生み出された「人間」といった風にロシア語に意識して見せるのである。

グリゴリエフによる「の」に関する議論は基本的に正しいと思う。だからこそ、このような神聖な「の」によってあいまいにすぎない一体化させられた「日本と私」の関係に新たな検証の光を当て、そこに隠された断絶や矛盾を見いだしていくことが、大江健三郎の課題になったと言ってもよい。「さて、正直に言えば、私は二六年前にこの場所に立つた同国人に対してより、七一年前にはぼ私と同年で賞を受けたアイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イェーツに、魂の親近を感じています」というノーベル賞講演中の大江の言葉は、術学趣味ではなく、なによりもまず、「の」のあいまいな粘着力から解放さ

れ、世界との自由な交通を求めべきだという倫理的な希求として受け止めるべきだろう。^④

つまり、「本当に世界に向かって開いた文学をつくり出す」ことが、川端康成から四半世紀後の大江健三郎にとって、切実な課題として認識されているということである。しかし、文学を「開く」ことはどのような可能になるのだろうか。それは単に、大きな国際舞台に出ていくというだけのことではない。大江健三郎は「世界文学は日本文学たりうるか？」と題された別の講演で、チエコからフランスに亡命したミラン・クンデラの作品に触れながら、彼が若いころチエコにいてチエコ語で書いた長編『冗談』が「本当に世界的なもの、アな作品」であるのに対して、著者がフランスに亡命してから、あたかもフランス語で発想されたのではないかと思われるように書かれた『不滅』のほうをむしろ、「イな言語としての、フランス語の産物という感じ」を与える、と述べているが、これはクンデラの小説の評価として卓見であろう。ここに端的に現れているのは、よりマイナーでウな言語(チエコ語)で書かれた作品のほうが、よりエな言語(フランス語)で流通することを目的として書かれた作品よりも、オな力を持ちえるという、言語(そして文学)の持つ根本的な逆説に他ならない。おそらく大江文学の「世界性」ということを考える場合にも、これは重要な鍵になる。四国の小さな村、あるいは脳に障害を持つ息子との共生、といったカ・個別的(個人的)な主題から出発し、そこに徹底的にこだわることを通じて、普遍へ通じる逆説的な回路を切り開くこと。これが世界に対する大江文学の基本的な姿勢である。

ただし、世間の常識に逆らうようだが、あえて付け加えれば、それが客観的に川端文学よりも世界にとって「わかりやすい」ものであるという保証はない。外国人にとつては、一義的に「美しい日本」という規定を打ち出せるはつきりしたものではなく、両義的であいまいなものよりもわかりやすいからだ。^⑤「わび」とか、あるいは禅といった日本の伝統的なものが外国人にわかりにくいだろうというのは、日本人の側の思い込みにすぎない。むしろ「あいまいな現代日本」に生きる日本人が何によって生きているのか理解することのほうが、はるかに難しいだろう。それゆえ、大江健三郎は川端に比べてはるかに厄介な課題を引き受けてしまったとも言える。しかし、それこそまさに現代日本文学がいま世界の中で置かれた歴史的ポジションなのではないだろうか。

(沼野充義『W文学の世紀へ』所収、「世界の中の日本文学」より。ただし原文の一部を変更した。)

問一 傍線部①に「パロディ的なこの表題」とあるが、どのような意味か。つぎの a ～ f の中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a この表題は、「美しい日本の私」という表題を一語だけ入れ換えて「あいまいな日本の私」とすることによって、川端講演が美しいものであると同時にあいまいなものでもあったことを指摘している。

b 「美しい日本の私」をもじった「あいまいな日本の私」というこの表題は、元の表題が象徴していた日本独自の美学がこの四半世紀の間に変化して、外国人にとってはわかりにくいものになったことを遠回しに非難している。

c この表題は、川端康成の「美しい日本の私」というタイトルを一部分、変更しながらまねることによって、現代日本文学もまたそのように過去の文学を部分的に変えながら模倣したものであることを明らかにしている。

d 「美しい日本の私」という表題を部分的に作り変えたこのタイトルは、元の表題が日本の外にいる「世界」の人々を自分と区別するような表現であったことを批判し、自分は世界に対して開かれた姿勢を取っていると主張している。

e この表題は、「美しい日本の私」という表題を「あいまいな日本の私」に変えることによって、この四半世紀の間に自分が同一化できる「美しい日本」がなくなり、自分のよってたところが「あいまい」になったことを風刺している。

f この表題は、「美しい日本の私」という表題を模倣しながら、その一部を変更することによって、元の表題に表されていた日本作家の意識を浮かび上がらせるとともに、それと自分自身の意識との違いをさりげなく示している。

問二 傍線部②に『の』の用法がきわめて日本的である」とあるが、本文に即すると、グリゴリーエワのこの指摘はどのような

ことを意味していると考えられるか。つぎの a、k、f の中から適切なものを三つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 川端講演の表題において「の」は、英語の and とは異なる日本語に固有の機能をはたしている。
- b 川端講演の表題における「の」の用法は日本人にしか理解できない。
- c 「の」を用いた「美しい日本の私」という川端講演の表題は、外国語に翻訳することはできない。
- d 川端講演の表題における「の」の意味は、外国人であるサイデンステッカーには正しく理解できなかった。
- e 川端講演の表題における「の」の機能は一義的に規定できない。
- f 「の」によって川端講演の表題は、世界(欧米)とは異なつた日本独特の美学を表している。

問三 傍線部③に「神聖な」とあるが、この言葉には本文の著者によってどのような意味が込められているか。つぎの a～f の中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 「の」は二つのものを一体化させる機能を持つことによって、「日本がこうであるからこそ、私もこうなのだ」という川端講演の主要な思想を表すために不可欠な助詞である。

b 日本語の「の」は英語の *and* などとは異なる機能を持つため、その用法は違う文化的伝統を引き継ぎ、違う考え方をする人間である外国人には理解できない深遠なものである。

c 「の」は、外国の研究者によって議論の対象となり、川端講演の表題の主旨を決定づける重要な語として、意味をとり違えてはならないとされている。

d 日本語の「の」の機能は一般的な外国人にとっては異質なものであるため、専門的な研究者でなければ川端講演の表題を正しく理解することはできない。

e 「美しい日本の私」における助詞「の」は、日本と不可分な形で結びついた自分という川端講演の真意を理解する鍵となるため、解釈を誤ってはならない特別な言葉である。

f 「の」の用法はきわめて日本的であるため、川端講演のタイトルは外国人にはわかりにくい、そこに込められた川端の真意を理解するために誤訳されてはならない。

問四 傍線部④に「倫理的な希求」とあるが、ここではどのような意味か。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 知識人の課題として熱心に追い求めること。
- b 国際人のつとめとして切実に望むこと。
- c ノーベル賞受賞者の権利として強く要求すること。
- d 文学者の使命として強く願うこと。
- e 日本人の本分として心から願うこと。
- f 現代人の義務として真剣に希望すること。

問五 傍線部⑤に「文学を『開く』」とあるが、ここではどのような意味か。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 日本文学と外国文学が排斥しあったり競合したりするのではなく、共存していくこと。
- b 日本文学が様々な言語に翻訳されて、世界中の人々に読まれるようにすること。
- c 日本文学を日本独自のものではなく、外国文学と同じ一つの世界に属するものとする事。
- d 日本国内に閉じこもって執筆活動をするのではなく、海外にも活動の場を広げること。
- e 過去の日本文学ではなく外国文学をモデルとして、新しい日本文学のあり方を開拓すること。
- f 日本の読者だけではなく外国の読者も意識して、世界から価値を認められる作品をつくり出すこと。

問八 傍線部Aの「ある転回」とはどのような転回のことか。つぎのa～fの中から最も近いものを一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a かつては日本作家は自分が日本と不可分な形で結びついた存在であるという意識を持ち、日本文学は世界(欧米)とは際立って異なつた日本的な美学によって評価されていた。一方、現代日本の文学は、作家が自分を日本と無関係な存在ととらえることによつて、「文学」それ自体として世界に受け入れられるようになった。

b かつては日本作家は、日本独特の美学はその他の世界とは根本的に違つていて当然だという世界(欧米)からの期待を引き受けざるをえない立場にいた。しかし、この四半世紀の間にそのような美学のあいまいさが明らかになつたため、現代日本の作家は、外国からの評価にとらわれずに日本文学の可能性を自由に追求していくことができるようになった。

c 川端康成の時代には、日本作家が自分のよつてたつところをその他の世界と区別して一義的に規定することができたことによつて、日本文学は外国文学とは異質な独自の美学をそなえていた。それに対して現代日本の作家は、逆に文学を通して、あいまいになつてしまつた日本人のアイデンティティのよりどころを回復することを目指すようになった。

d かつての日本作家は自分を日本と一体化した存在とみなしていたため、日本文学は日本という国全体にとつて普遍的な問題を取り上げていた。しかし、現代では日本という国が「美しい日本」といったように一義的に規定できないあいまいなものになつたため、日本作家は個人的な主題に徹底的にこだわるようになった。

e かつては日本作家は自分を外国人と区別して明確に規定することができ、日本文学も外国文学とは一線を画した特殊な文学と考えられていた。それに対して現代では、日本作家が日本人のアイデンティティの基盤があいまいであることを自覚するとともに、日本文学は外国文学と同じ地平で世界に受容されるようになった。

f かつての日本作家は世界に対して「美しい日本」という規定を一義的に打ち出すことができたため、日本文学は外国の読者にとってはそれほど理解しにくいものではなかつた。一方、現代では、「あいまいな日本」に生きる日本人が何によつて生きているのかを外国人にわかりやすく伝えることが、世界における日本文学の課題となつた。